ことを確く信じてゐるが、それまでにはなほ少時の困難を堪へねばならぬ。その間同學諸賢の高說勞作に啓發される機會は乏しくなるであらうが、著者のいよ〳〵精進加餐を願ひ、併せて同學諸賢の自重をも冀ふ次第である。（A5版、三八六頁、昭和十九年八月、岩波書店刊、價六・〇〇）（平山敏治郎）。

昭和十五・十六年度東洋史研究文獻類目

東方文化研究所編

この類目は昭和十年七月第一册を出した同研究所編の『東洋史研究文獻類目』の第六册に相當るもので、收むる所表記の二年間に於ける日本・支那・歐米に亙る關係文獻を類聚してゐる。從つてその體裁は既刊のものと大差ないのであるが、併し本册からは從來單に書評のみを載せたに過ぎない單行本をば新たに收錄して、通じての文獻目錄たるに至つたのは注記すべきであるし、なほまた卷首に同研究所員が分擔執筆した學界展望を載せたことも精粗必ずしも一でないが、一般利用者に便益を與へるものとして、編者のこの種類目の編纂に對する熱意がそれ等から充分に認められる次第である。

今度の戰の急迫化に伴うて、出版文獻の入手に困難を伴ひ、それは支那・歐米をも含めた本文獻類目に於いて殊に大きいことであらう。從つてうちに遺漏のあることは免れ得ないし、また印刷も容易でなく、引いて是等から本册の出版期日が遲延したと考へられるが、全般の研究を進める上に重要な役立ちをするこの事業、而も一面に於いて兎角型にはまり勝な面を持つ文獻類目の作製に於いて、本書の如く册を重ねて內容の充實に意を用ゐられてゐるのは我が東洋史界の爲に慶賀すべきである。公的な研究所の事業として今後もその續刊が當然期待せらる。本類目に先立つて公刊された筑波家國史研究部の年々の『國史學界』が同樣引續いて印行されてゐるのはよろこばしい事であるが、たゞ同書は當初の內容の整ふたに較べて、年々形式に墮して行つて、內容に遺漏の多いものとなる傾向の見受けられることや、前年來出版の文獻目錄の類がやゝもすれば糊と鋏で作られた機械的なものゝ多いのを思ふにつけ、本書は一つの籠を與へるものであり引いて改めて紹介することにした次第である。（B5版、二八〇頁、京都印書館發行、定價㊟拾圓）（梅原末治）。

南海に關する支那史料

石田幹之助著

近時一般東洋學の目覺ましき發達に伴ひ、南海史の研究も長足の進步を遂げ、その南海諸地域に政治的・經濟的・宗教的關係を有する歐米諸國學者の研究成績には見るべきものがある。我が國に於ても大正初年以降、故藤田豐八博士を始め、少數乍ら優れた學者により研究がものされ、夫々專門學術雜誌に揭載されたことは周知の通りである。併し乍ら元來この地域が東洋文化の中心地からかけ離れてゐる關係から、南海史については一般に關係が薄く、從つてその研究は東洋史の他の部分に比べて立遲れの狀態に

あり、未開拓の分野が多く、此等の開拓は今後に殘された感が深い。ところでこれを行ふに基礎となるべき史料は遺憾ながら乏しく、殊に西力東漸以前のそれについては斷片的な碑銘、概ね內容不確な史傳、年代記と言つた樣な現地史料、ギリシヤ・ローマの古典に見える零細な記事、若干の中世アラビヤ・ペルシヤの地理書・旅行記等の西方史料、それに幾らかの東方、支那所傳の史料が存するのみで、研究は比較的僅少の此等史料を吟味し、その價値をよく理解し、十二分に活用することによつて果されねばならない實狀にある。以上三者の中最後の支那側史料は他の二者に比し諸種の事情から量的に豐富なばかりでなく、質的にも概觀して最も信據性に富み、少くも西力東漸以前の南海史を究めるにはまづ最も有力なものと云ひ得る。故藤田博士は夙にこの點に鑑みる所あり、「南洋に關する支那史料につきて」(『臺灣日々新聞』掲載『劍峰遺草』所收)を發表、次いでかねてよりこの方面に意を留めてゐた本書の著者石田氏も數年前既に「南海諸國に關する支那史料」(『新亞細亞』第一卷第四號掲載『歐米に於ける支那研究』所收)なる一篇をものする所あつたが、氏が昭和十七年秋東北帝國大學より南海史料に關する講義を委囑されたのを機會に、その講義稿本を補訂數倍に及ぶ加筆を行つて今度公にされたのが本書である。

本書は序說の外、第一講「南海に關する漢代の記錄」、第二講「三國時代に於ける南海知識の增進」、第三講「兩晉南北朝時代の南海史料」、第四講「隋唐時代の南海史料」、第五講「宋元時代の南海に關する史料」、第六講「明初に於ける南海知識の擴大」の六講より成り、各講は更に二三の小節に分れ極めて要領よく纏められてゐる。著者も言へる如く、元來が學生に對する講義を目的としたものであり、文體も講演體で稍冗漫の嫌ひはあるが、內容は初學者向きとして平易且つ懇切に說かれてゐる。卽ち本書の各講に於ては先づ以下の史料解說に必要な範圍內で、その時代の南海關係の豫備的知識を賦與し、次いで史料の解說に及び、進んでこれを利用した內外研究の成績の一斑を述べ參考文獻を擧げて今日の學的水準を示すと共に、將來の研究に對する示唆を與へてゐる。講述が明代初期に止まつたのは著者が序言に言へる如く、これ以後になると西洋史料がより有力なものとなるからに外ならず、尙安南に關する史料について說明を省いたのは、この方面の知識が乏しい爲と著者は斷つてゐるが、同國獨立以後は漢文の安南側史料が存して、之が支那史料より一層有力なものとなることをつけ加へねばならない。それは兎も角、本書は類書の乏しい今日、その最も優れた史料解說書であると共に、南海史研究の好個の入門書と言ふべく、後學を裨益する所甚だ大である。尙本書に地圖のないのは著者も遺憾とされてゐるが、これは急速出版の必要から已むを得ないことであり、なほ索引の添加も望ましいが、此等は著者の期せられる他日の增訂の際必ず考慮せられる所と信ずる。

尙序でながら私の見た昭和二十年四月發行の本書には目次末尾にある追補は本文にないことをつけ加へておく。

（昭和二十年四月、生活社刊、三二七頁、定價八圓二十錢）（藤原利一郎）

蒙疆陽高縣漢墓調査略報

本書は昭和十七年の春秋に亙つて、大同石佛保存協會と陽高縣史蹟保存會の協同主催で行はれた同地古城堡に於ける三基の古墳調査の結果を概述し、添へるに出土品の目錄を以てしたものである。この漢代古墓の發掘は墓室が地下深くに位置した爲に多大の勞力を要したのであつたが、三基を通じてその木組の墓室なり、夫婦を埋めた棺がそれ〴〵稀に觀る完好な保存狀態を示し、且つ多種多樣な副葬品を存したこと寧ろ朝鮮平壤附近に於ける漢墓の例を凌駕するものがあつて、これが棺内に於ける遺骸處理の示す新事實と共に大いに學界の注意を惹いたのである。それ等が短時日の間に處理を經て調査主任たる水野清一氏の手で、發掘の經過をはじめ構造なり副葬品の一斑が、右の實狀を傳へる寫眞と共に公刊を見るに至つたことは學界の知見を高める適切な處理として大いに歡迎さる可きである。一體學術發掘の結果の報告は當然公刊せらる可く、またそれは詳細に亙るべき筈である。併しこの爲に遂に出版に至らない遺跡が可なり多い事になつて、かへつて學問の發達の妨げる結果を來してゐる實狀にある。陽高の樣な新しい知見に就いて、先づ概報の印行を見たことは、記述が要領を得たものたると相俟つてまさに右の缺陷を補ふものである。たゞ本書にあつて三枚の挿圖を添へてあるが、それ等は孰れも塚の外形と墓室の位置を示してゐるのみで、より必要な墓室の構造なり副葬品の配列の圖を缺くが爲に、文章で可なり長い說明が加へられてゐるにも不拘、隔靴搔痒の感のあるのは遺憾と云ふ可く、なほ遺跡の性質觀として、これを朝鮮平壤附近の漢墓と比較して其差異として擧げられてゐる一半が、執筆者の後者の知見の不充分に依て誤つてゐること、例へば棺前に墓鎭を置くことが早く石巖里の第九號墳に於いて認められ、また屍を厚く絹布其他でまくことも同地第二一二號墳其他で認められる事實を擧げて、兩者の一致のより著しい事實を附記して置く。

（A5版、本文七五頁、挿圖三枚、圖版十二頁、大和書院刊、定價壹圓九十錢）

古代の南露西亞

ロストウツエフ著
坪井良平・榧本亀次郎兩氏譯

この書はロストウツエフ教授の "Iranians nd Greeks in South Russia" (Oxford, 1922) ——どうした事か右の書名は本書のどこにも見えない—— の全譯に譯者の注記其他を添へたものである。原書は改めて云ふまでもなく、南露西亞古代に關する既往の諸見解を綜合して考古學に偏することなく、その實狀をば容易に近づき得ない露西亞本國以外の學界に傳へようとした書物である。既に出版後二十年以上も經過してはゐるが、それがもと我が國に於ける所謂歐亞大陸北部の古文物を論ずる人士の殆んど唯一の據所をなしてゐる點よりし、なほ同教授が引續いて公にしたその分野から支那の古美術を論じたものに較べて、記述が概ね妥